

令和３年度 第２回千歳市公立大学法人評価委員会 議事要旨

1 日時 令和３年８月１７日（火） １４時から１５時３０分まで

2 場所 千歳市役所庁議室（WEB 会議）

3 出席者

【委 員】 委員長 佐伯 浩
委 員 小川 恭孝
委 員 福村 景範
委 員 森木 博之
委 員 千葉 崇晶

【千歳市】 企画部 品田部長 小尾次長
公立大学政策課 佐藤課長 前田係長
産業振興部科学技術振興課 石村課長 京屋係長

4 傍聴者 ４名

5 会議次第

- ・開会
- ・議題
 - （１）公立大学法人公立千歳科学技術大学 令和２年度業務実績評価書（案）について
 - （２）その他
- ・閉会

6 会議の概要

(1) 結果概要

第１回評価委員会における意見を踏まえ作成した令和２年度業務実績評価書（案）について審議を行った。本日の意見を踏まえ評価書（案）を修正することとし、その内容確認については委員長に一任された。また、評価スケジュールについて説明し、了承された。

(2) 議事概要

議題（１）公立大学法人公立千歳科学技術大学 令和２年度業務実績評価書（案）について
評価書（案）について事務局が説明し、その後審議を行った。

【事務局】本日は、「資料１」の評価書（案）と、「資料２」の小項目別評価（案）について、ご審議をお願いします。評価書（案）については、７月２９日付けで皆様に送付し、内容を見ていただいておりますが、事務局でその後変更した箇所がありますので、そちらを先に説明します。「参考資料１」の表紙の上部に、「※ 第１回評価委員会資料２ 評価書（作成

例) との変更点は赤字及び青字(7月29日以降追加)で記載」とありますが、この青字で記載した部分が追加修正箇所となります。4ページ中段、「専門教育担当教員の科学研究費助成事業の応募申請率」の部分が、修正した箇所となります。これは、大学の指標の一つである科研費の応募申請率について記載している所ですが、年度計画に定める指標の文言が「専門教育担当教員の科学研究費助成事業の応募申請率50%以上を目指す」となっていることから、文言を年度計画にあわせ、修正したものです。次に、15ページ中段、こちらも同じ理由から、「専門教育担当教員の科学研究費助成事業の応募申請率」と修正したものです。追加の修正箇所の説明は以上となります。

次に、業務実績評価書(案)について説明をいたします。

まず、第1回の委員会でいただいたご意見が、評価書(案)のどこに反映しているか、説明いたします。8月12日に「説明資料1」、「説明資料2」をメールと書類でお送りしております。「説明資料1」は、第1回評価委員会の議事要旨であります。黄色マーカーを引いたところは、第1回評価委員会でいただいた意見を評価書に反映させた部分です。その横に番号を記載していますが、この番号が、「説明資料2」の業務実績評価書(案)の番号と対応しています。両資料の番号をご覧くださいと、それぞれのご意見が、業務実績評価書(案)のどこに反映しているか、お分かりいただけると思います。

「説明資料1」の議事要旨の5ページ、①については、コンテンツ改修件数についてのご質問がありましたので、ご質問の趣旨を踏まえ、「説明資料2」の業務実績評価書(案)では、4ページの下から7行目、①のとおり、指標の整合性の確認などを求める旨記述を加えています。

次に、「説明資料1」の議事要旨の7ページと8ページ、②については、「業務の実績について、詳細な記述や定量的な数値の記載を」とのご意見をいただいています。このご意見を踏まえ、「説明資料2」の業務実績評価書(案)では、4ページの下から11行目、②のとおり、「具体的な取組内容が分かるような記述」を求める旨記述を加えています。

次に、「説明資料1」の議事要旨の10ページ、③については、「外部資金の獲得に関して、現在件数を指標としているが、先々は、金額を指標としてはどうか」というご意見をいただきました。そこで、「説明資料2」の業務実績評価書(案)では、15ページの下から5行目、③のとおり、「指標として金額目標を掲げることの検討」を求める旨記述を加えています。

次に、「説明資料1」の議事要旨の13ページ、④については、「国際交流について現状に満足せず、先を見ながら進めてもらいたい」とのご意見をいただきました。そこで、「説明資料2」の業務実績評価書(案)では、11ページの最後の部分、④のとおり、「各教員が教育研究力を高める取組により、大学の国際化の進展を期待する」旨記述を加えています。

次に、「説明資料1」の議事要旨の17ページから18ページ、⑤については、「人材育成についても評価書に記載する」ようご意見をいただいています。そこで、「説明資料2」の業務実績評価書(案)では、4ページの下から2行目から5ページの1行目にかけて、また、5ページの下から4行目の⑤のとおり、「人材を育成」していくことを求める旨記述を加えています。

次に、「説明資料1」の議事要旨の19ページ、⑥については、「先生方の外部資金の確保と研究成果の向上」についてご意見をいただいています。これについては、「説明資料2」の業務実績評価書（案）4ページの下2行から5ページの3行目の⑥の後段のとおり、「教員各位が外部資金を獲得し、研究成果を高める」旨記述を加えています。

今回、評価書（案）にご意見をいただいていますので、意見交換により、より質の高い評価書にしたいと考えています。よろしくお願いします。A委員からご意見をいただいています。7月29日に皆さんに評価書（案）をお示ししていますが、A委員から、「赤字で加筆された部分、かなり提言色強めのトーンになっているが、ここまでの意見を発した方の記憶がない。どの辺の議論を受けて加筆修正したのか」とのご質問をいただきました。そのため、議事要旨に評価書（案）の根拠となる部分にマーカーをしたもの、説明資料1の議事要旨の番号がついていないものをお渡ししています。これを踏まえてご意見をいただいています。

いただいているご意見は、1つは、評価書（案）の朱書きで追記した部分について、全体的に強い提言調になっているのではないかとということです。この点について、皆さんのご意見をお願いします。

【委員A】全体的な話をした方が良いかなと思うので、少しお話をさせていただきますけれども、流れとしては、事務局が説明したとおりです。私が29日に受け取ったときに、特に4ページから5ページですね、この評価書（案）のトーンが、20日の会議でここまでの強い感じだとまとめてなくて、むしろ一個一個の着地はCでしょうか、Bでしょうか、というような話が主だったので、上の文章の文意と合わないんじゃないのと。ここまでの議論にはなっていないんじゃないか、と思ったのですが、事務局は根拠があると言うので、後日、議事録と一緒に示してもらったのが黄色マーカー付きの資料です。

さすがにちょっと、先生方もいろんな流れの中で、それだったらこうしたら良いんじゃないの、というのを個々で答えたものが、少し大きめに、大きな話になっているな、というのは感じていたので、事務局に熟考しますということをお返ししました。事務局から、それであれば、先に修正点をいくつか知らせてもらえませんか、ということから、先に個人的にお知らせはしています。

ですが、特に29日の案について、ほかの先生方から大きな意見はなかったということなので、むしろその事務局案に入れてくれてありがとう、という方が多数いらっしゃるんだと思うので、8月12日まで、お盆前までは考えるつもりではおりました。

今日は全体の流れとして、各委員の方が「私の発言はこういう意味だったんだよ」、ということであれば、私はそれに賛同いたします。でも、全体の流れで、特にこの総論のところがパッチワーク的になっていますので、一個一個については、やめるとか文意を変えるとかしても良いんじゃないかということを、今日お願いをしています。先生方の発言がそれぞれの黄色のマーカーになっているので、いや、ここまでの意味じゃないよとか、いやもっと強い意味だよとか、ご意見をいただければ良いのかなと思います、①についてどうですかこうですかというのは、ちょっと生産性が低いかなと思うので、先に申し上げておきます。

【委員長】今のご意見に対して何かございますでしょうか。

この研究の所に関しての書き方は特に難しく、どういう状態がベストかというのが、なかなか分かりにくいところもあります。特に大きな大学ですと、学内に競争する研究者もたくさんいる、あるいは、複数の研究者の研究が一部オーバーラップしながら、研究が進んでいるということで、同じ職場でも競争が激しい状況があつて、そういうところだから良い成果が生まれるし、場合によっては、研究費も多く勝ち取りやすい、という状況があります。

またその一方で、研究者の数というか、教員の数が少ないと、近くで競争するという環境が少なくなり、ついつい、今までの研究の流れの線上に、次の研究も進めていくということで、新たな切り口からの研究というのが出にくい。そういう意味で、研究機関の規模によって、研究に対する意欲や、研究資金を必要とする度合いなどが違ってくるとするのは、間違いないことだと思います。

そのあたりも含めて、何か委員の皆さまご意見ございませんでしょうか。

【委員B】ちょっとよろしいでしょうか。A委員にお聞きしたいのですが、4ページのところで、②、私の意見のところが書かれていて、特に5W1Hで明記していただきたい、とその時の議事録にも書かれていて、このたびの評価書（案）に書かれているのですが、この辺が、ちょっと書き過ぎなんじゃないか、というご意見なのではないでしょうか。それとも、評価委員会の時にはこういうことを言いましたが、本来的にはこういう評価書の中に載せるべきではないのではないか、というのがご意見なのではないでしょうか。ちょっと理解できなくて。

【委員A】いいえ、そういうことはありません。これは、会議の中で、はっきり一個一個これが決まったみたいにやっているのもあれば、検討しましたみたいにさらっと書いているのもあって、それで何件中何件いけました、いけません、というのは、私たちは表の字面を追うだけではよく分からないと。なので、もっと分かりやすく書いた方が良いんじゃないか、という会議の文脈だったと思うんですよ。それが何かもう全てのことに於いて、これを読むとですよ、「なお」で始まっているので、これらを受けて、5W1Hを明確にきっちり書きましょうみたいなことって、大学には伝わらないんじゃないの？空振るじゃないの？というのが私の意見、ここまでの話になっていなかったんじゃないの？というのが私の意見です。B委員先生がそういう意図じゃなかったら、それはそういうことだと理解します。

【委員B】私はこの前の時には、大学の方には5W1Hで書いていただきたいと。今後はですね。そういうことに努めていただきたい、という感じで、話をしたつもりでございます。

【委員A】分かりました。理解しました。

【委員A】5W1Hの所は、B委員の仰った内容、非常に良く分かりました。各論に入った方が早いかなと思うんですが、このプログラム改修の所について書かれている、①がそうなのかと思うんですが、議事要旨の5ページ、C委員が仰ったように、これは、不可抗力じゃないの、と仰ってくれている意図だと思ったんですが。これが、ロードマップも出しているのに、整合性を確認していただくとともに、定量的な指標について進捗を書きましょう、みたいなことにどうやったらなるのかというのが、分からないんですけど。C委員から補足いた

だいた方が良いかなと思いますけど。

【事務局】すみません、事務局で説明をしてもよろしいですか。事務局がC委員にいただいた意見をまとめたものですが、年度計画で、リクエストによるコンテンツの改修件数が指標になっている中で、大学では、リクエストに基づく改修件数以外にも含む形で実績の数字を記入されてきたので、それではちょっと分からないのではないのでしょうか、という意味でご質問いただいたのかなと、事務局の方で解釈をしました。指標が何であるのか毎年分かるようにしていただかないと、良くなっているのか、クリアしているのか分からなくなるので、そのことをきちんと書いてください、という趣旨のご質問かと事務局の方で解釈をして、作成したものです。ですので、もし、質問の趣旨がそこまでのことではない、ということであれば、コメントを変える必要があるのかなと思っています。

【委員A】これ自体は一般的な話で、数字の進捗をちゃんと書きましようというのは、誰も否定しないと思うんですよ。でもそこがこのソフトウェアの改修の所に端を発しているということなんですね？そういう風に理解されたということの。発言者がそういう意味ですということであれば、私は異論はありません。私の発言ではないので。

【委員C】対象範囲が違ったんですよ。コンテンツの改修件数に関して。ということで指摘させていただいて、範囲も明らかに違ったので、数字を挙げる以上は、ちゃんとチェックをしていたきたいという趣旨で申し上げたんですけど、確かに事務局が案として記載しているとおり、変遷等を、過年度の数字も踏まえた上でこうなっています、という書き方にしていただければ、見る方にとっては見やすいものになると思いますので、私はこれでも良いかなとは思っております。

【委員A】はい、分かりました。ありがとうございます。

【委員長】ほかに何かご質問、ご意見ございますでしょうか。

【委員A】⑤⑥のところですね、「公立化により」から始まっているところです。ここについては、非常に重要なことが書いてあると思いますが、一番大きな要因としては、先生です、先生の教育力、ということだけじゃなくて、お金も集めましよう、研究もやりましよう、授業もやりましよう、というようなことで、ある意味、質と物量、先生の教育力というのを謳っています。それが、議事要旨の中に、⑤、あるいは⑥でマーカーが引かれたところなんですけど、本当にここまでの理念に出されるようなこと、あるいは、中期目標にそこまで先生の質を上げましようとか、先生もっと頑張れよ、というような意図になっていたかな、というのがあります。それぞれの根拠は議事要旨の15ページ辺りにあったのでしょうか、例えば「期待する」となっているところが、こっちは「必要である」と書いてあったり。各自の研究成果を高めていくことについて。かなり強い訴えかけで、そんなの見切っていないのに、空振るんじゃないかというような所があります。一方科技大の理念に関わる、立ち位置に関わるような話なんですけど、本当にこれが、中期計画はちゃんとやりますと言っている大学に刺さるのかな、という思いはありました。5番も6番も、全くこのとおりと、先生方はこのつもりで言ったんだと、このようにまとめていただいて本当に助かると、ということであれば私は異論はないですが、評価委員会の内容というよりは、もう完全に、科技大の理

念というか、こういうことは皆さんベースで分かってるよね、くらいの話なので、上の流れで「評価する」「評価する」となっていて、急にここでガツンとくる文脈というのは、ちょっと付け足し感が強いんじゃないかなと思いました。

それは、一番下の「人材育成に注力し、世に有為な人材を輩出し続けること」という所にも勿論かかってきます。私たち委員で、7月20日に、「大事だよね」という話は全体の流れから言った方がいましたが、こういう議論であったかなって、正直なところそういう風に思いましたので、疑問を呈しました。ですので、先生方のご意見を伺いたいなと、むしろ思っています。グローバルに頑張らましようって言いながら、最後の締めは千歳で頑張ってるね、となっています。何かちぐはぐ感がすごい。何を伝えたいのか、というのが、全般浮かび上がってこない文章だなと捉えたので。全体の意図がこれで良いと皆さん仰るのであれば、特に私は反対はいたしません。

【委員長】 どうもありがとうございました。ほかに何かご意見ございませんでしょうか。このお金に絡むことや、研究のアクティビティというようなことは、厄介な問題も含んでるものですから、組織体の中にいる方で議論するというのは、必要なだけでもやっぱり難しい、という現実があるのではないかという気がしておりますが。

【委員B】 私、⑤の所の意見を言った者なんですけども、私の本意としてはですね、千歳科技大ということで、「千歳」「千歳」「千歳」ということで、「千歳学」などいろいろありますので、ちょっと小さく絞られ過ぎていないかなと、いうのは気になっていまして、そういう意味から、題材を千歳に採るのは良いんでしょうけれども、もっと国際化に対応した人材を育てていただきたいと、そういうような思いが強いものですから、こういう表現をしました。

ただ、ほかの先生方が、千歳科技大について、ここまで思われていない、ということならば、外しても結構だと思いますけども、私自身としてはやはり、人材育成に注力して、より有能な人を、是非とも育成していただきたいという思いがございました。私個人の意見ですけどもね。それが評価委員の意見と違ったら、それはまた考え直す必要があるかと思っております。

ご意見どうですか。ここまで書く必要ないんじゃないかと仰るのであれば、よろしいですけど。

【委員長】 この問題非常に難しくてですね、私も大学から離れて十年程経ちますが、それまでの経験から申しますと、国際会議などに行きますと、活発な研究をやっている先生方の所の学生は非常に意識が高いと言いましょうか、国際会議にどんどん学生が発表に出てくるのです。それが、若い人にとってモチベーションになって、さらに深く研究していこう、ということにつながっているんだと思うのです。学生さんが国際学会などに出席するためには、先生が研究費を持っていないと出席しにくいと思います。国際学会の論点になるようなテーマに関係してないとなかなか海外の学会に行きにくい。そういういろんな事情があって、教育と研究は、大学にとっての使命ですが、良い研究者に恵まれ、研究資金に恵まれた所の学生さんは、それだけ、ほかの大学や研究室に比べると、いろんな状況、環境を体験することができ、ほかの国の学生さんの状況なども知ることができ、それが大学としても、どんどん良い方向に行く、ということになります。

大学での研究成果を挙げるのに一番大切なのは、教育・研究への教員の情熱と、根っこには研究資金が関係していて、研究を深堀をして新しいことに展開をしていくにもお金がかかる、あるいは学生さんに国際的な経験をさせたい、と思っても、資金面で不可能となる。今の日本の大学は、まずは研究資金をもって自分の研究目的を達成したい、同時に若い人にも、早くそういう経験をさせてあげたい、という思いがあります。

組織として、何とか研究費が潤沢な状況を作って、良い研究成果を挙げて、そこで学ぶ若い人たちも、モチベーションを高く研究を続けていけるようにして欲しい。日本の大学生は海外の優良大学の学生に比べると、学びや、研究に対するモチベーションが小さいんですけど、それでもそれを千歳の公立大学を目指そう、目指して欲しいというのが我々の願いでもあります。

ただ、お金とすぐ結びつくというのが難しくて、やはり全国の大学がそれを目指しているわけですから、資金を獲得するのが難しいという状況が現在あります。一般的な国の評価委員会でも必ず、国際化とか、研究力という時に、研究費をどれだけ持ってきたんだ、というのが一つ大きな指標になっているというのは、間違いないことです。そうすると、何としてもまずはお金を持ってこないで、自分の所の研究もなかなかできにくいし、良い学生さんも育てられないし、国際化していこうとする学生さんのモチベーションにもこたえることができないというのがあって、難しいところはあるんですね。この辺りの評価書の書き方は、非常に重要な大学の評価の視点になっているんですけども、作る側にとっては非常に苦しい悩みというものが出来ざるを得ないんじゃないかな、という気はします。

何かご意見ございましたら是非。大学の方に、あるいは先生方を勇気づけるようなご意見が出ればありがたいと思うんですが。

【委員A】 ありがとうございます。今現実大学がそうだ、というのは大変勉強になりました。

B委員のご意見も、非常によく分かって、文章自体が、何か間違ったことを書いているとか、B委員の思いを何か、という意味合いは全然ありませんので、そこだけは申し上げておきたいと思います。でも委員長が仰るように、現実がそうある中で、職員さんがまさにその現場の肌感として知っている中で、委員としてどういうメッセージを乗せてあげるのがいいんだろう、細かいところではコストダウンもすごく頑張ってる、というアピールが出てきています。いわゆる専門教育担当教員の限定用法で、そこは評価する、と言ってる中で、まだまだその各自成果を高めていくのが必要だとか、外部資金を獲得しましょう、というのは、要は「分かっとならわい」、というようなことになりかねなくて、この最初の1ページ2ページで、学校側が、一緒にやっ払いこう、と目をむいてくれないと、メッセージ性を誤るんじゃないかな、という意見です。私はここに理想を高く書くこと自体は間違っていないとは思いますが、トーンとして合っていますか？ということです。委員長の現実のお話として、そうは言っても実は難しいんだと仰ったのが、多分それが本当なんだろうなと。B委員が仰るように、もっともっと、そこは千歳にとどまらず、ワールドグローバルな学校を目指していかないと駄目だろう、という檄、発破、あるいはとどまって小さく固まるな、という意図があるんだったら、そういうものが入っても良いかなと思ったんですけど、私が一個一個の言葉にこだわり過ぎだということであれば、ちょっと皆さんの注意をいただきたい。

【委員長】今大学の評価の在り方というのはまだ過渡期だと思うんですね。本当にこれが大学の将来にとってプラスになる評価方法、評価になっているのかな、というのは、私も大学にしながら、常に疑問に思いながら評価をやってきたというような状況なんですよ。

要するに、日本で、今回も出ていましたように、専門教育の人は勿論研究成果をきちっと評価するのは必要だし、お金のことについても考えよう、というようなことになると思うんですが、専門教育以外の人はどうかという、この大学の将来目標の一番重要なところからちょっと外れた状態になっているんですね。ただ教育だけに専念しなさいというようなことになっているんですが、これが欧米の大学との大きな違いで、例を挙げますと、国立大学でも、文系の方はあまり学位を必要としていないんですね。学位を持っていない先生がたくさん文系の教授の中にいらっしゃる。それに対して理系は持たないことには研究もできないといったようなことになる。それから教育だけを担当している先生についても、欧米では、常勤の先生では教育だけを担当している先生というのは非常に実は少なく、教育と研究をやるのは一体となっているという所が実は多いんですね。文系も理系も同時にですね、良い大学に高めていくためには、研究だとか国際化とか、同じような目標を持つべきだと思うんですが、現実はそのままでいていないというのが日本の大学の現状かと思います。

前の滋賀大学の学長、この方は京都大学経済研究所の所長をされた方ですが、その方が話されていたのが、日本はちょっと文系の先生たちに甘いんじゃないか、理系には競争、競争と言いながら、文系の先生には競争しろと誰も言わない。そのかわり、研究費もくれない。欧米は違う。欧米の大学では、経済学会の論文集、これに論文を出すために必死になって研究成果を発表する。日本の将来を考えると、文系も理系も関係なく、新しいことにトライするという状況を作らないと、まずいんじゃないかと言われました。アジアの大学のほとんどの文系の先生方には、国際的な競争という意識が全然ないんだ、という話をされていました。

専門教育と、基礎教育と言いましょうか、それに当てはまらない先生方をちゃんと分けてやらざるを得ないというのが日本の状況です。将来的には、文系の人も競争する、理系の人も競争する、そのような人材を養成していくことが必要かなという気はしています。

北大にも文系の先生方もたくさんいましたけれども、彼らから見たら理系がものすごく競争資金の獲得に迫られていて、異常な状況だと感じると話す先生もいらっしゃいましたけど、現実世界は、どちらかというと、日本の理系と同じような競争資金獲得の状況が、文系にも求められているというのが、国際的な大学の流れのようであります。

そういう意味で、この評価のやり方も非常に難しく、先ほどの専門教育とそれ以外の教育をちゃんと分けて書くということにしても、欧米ではおこらないのではないかという気がします。欧米の方はそれぞれの道でトップを目指そうとしている状況があるという中で、日本の特異な環境というようなものがあるかと思います。この影響はいろいろな所に出ていまして、研究者の層の厚さも、理系はどんどん厚くなっていくんですが、文系の方は厚くなるというよりは薄く平たくなっていくと、文系の先生自身が仰っている位、欧米と比べると遅れていっていると感じます。本来であれば大学の教育というのは文系だから理系だからということではなく、教育や研究に携わる意識は文系理系関係なく、同じ志を持つというような

方向にいくべきではないかと私自身は感じております。

ほかに何かございますでしょうか。

【委員D】確かに評価書にどう書くかというのはなかなか難しいことではありますが、4ページから5ページにかけまして、千歳科技大さん高い理念を持って頑張ってください、というメッセージは伝わるのかなと思います。

私が気になっておりますのは、ちょっと前に戻るんですが、4ページの①ですね、変遷が分かるようにしていただきたいという、この①のところが、科技大さんで、どこを指しているのか、というのが分からないんじゃないかなと。C委員がご指摘された所を具体的に書いた方が、どういう点を指摘されたかということが分かりやすいのではないかと思います。①のところをもう少し具体的に表現することを提案いたします。ほかは、理念としてよろしいかなと思いました。

【委員長】どうもありがとうございました。事務局いかがでしょうか。今のご提案がありましたけれども。

【事務局】今のご提案で具体的なところを、例えば「コンテンツ改修件数など」というような言葉をこの作文の中に入れ込むというようなことが考えられるんですが。

【委員D】よろしいのではないかと思います。

【委員長】A委員それでよろしゅうございますか。

【委員A】今のところは、コメント賛成いたします。

【委員A】委員長のお話を聞いて、文系のことなど、そこは良く分かりました。もし皆さんが「過渡期であり本当に苦しい中なんだけど、これから先生の質を高めて、きっちりお金を獲得していかないと、これ以上良くなれないというようなことをもやはり提案する」、というのであれば理解します。ただ、理念として正しいから、現実と理想がかけ離れていることは承知の上で、ここを目指せ、というのは、僕は多分伝わらなくて、ここって私たちも苦しんでるんですっていうのが返ってくるだけじゃないかなというふうには思いました。だから、そちらがいろいろご検討して苦しいのは分かるし、いろいろ成果が出ているところもあるので、これからは先生の、中身というか、質と量を高めるのをお互いやっていきましょう、というのであれば、私は納得いたします。はい。ほかの方の意見もいただきたいところです。

【委員長】他に、ただ今のご意見に対して何かございますでしょうか。

【委員B】はい。よろしいでしょうか。A委員がこだわられているのは、学校側を気にされているのは、我々がですね、例えば5ページの上の方に「課せられた使命である」とか、「何々は必要である」、この二言にこだわられているのかなという気がするんですけども。これでもういきなり理念みたいなのをポーンと、評価書に書いても良いのか、ということじゃないかなと思うんですが、どうなんですか。

【委員A】皆さんがそれぞれのご発言の背景に、今のような思いで申し上げているというのでしたら、それで良いかなと思っています。私は、当日の記憶をたどって、ここまで先生にちゃんともしっかりと注力させよう、みたいな合意形成はなかったかなと思ったので、最初に事務局

にメールさせていただきました。こんな強い話でしたっけ、っていう言い方なんですけど。だけどやっぱりここが、現実を理想がかけ離れていても、大学側に求めていくところなんだと、我々がこの立場として判断するんだったら、積極的に書くべきかなと。でも、グローバルもやってよね、金も集めてよね、事業もやってよね、千歳のためにも頑張っただけ、という書き方で最後締めているっていうのは、ちょっとこう体裁だけが整ったような意図で、本当に向こうに刺さるのかなっていうところは、事務局にも聞きたいところなんですけど。

【委員B】 やっぱり私は大学側としては、きちっと受けてくれるんじゃないかなと思いますけどね。言ったことに対しては。

【委員A】 分かりました。

【委員B】 法人に課された使命であるということも、やっぱり大学も目指しているんじゃないかなという気はします。最初ですね、この評価書の中には、今年度の中に書いていませんけども、大学の基本理念みたいなのところがあるんじゃないかなと思うんですよね。それと合致しているんじゃないかなと思います。それは事務局の方で調べていただいて。

【委員A】 そこを知りたいんです。去年科技大から返ってきた文章では、本当にちょっとなんか、え、こんなところ引かかるの、みたいな感じだったので。そこをちょっと気にしました。

【委員B】 今我々見ているのは、あくまでも令和2年度に対する評価ということで、集中していますけれども、その裏にはやっぱり学校が目指すべき姿っていうのはあると思うんですよね。その学校が目指すべき姿、あるべき姿と、令和2年度の評価と、合わさった形の評価になっても問題はないんじゃないかなと私は思っている。あくまでも令和2年度だけの、この評価書だけを見てですね、この文言だけを評価しているんじゃなくて、やっぱり学校の掲げた考え方、これから先の法人のあり方、これも踏まえて令和2年度と、合わせて評価、コメントをしていく、ということが大事じゃないかなとは思っています。

【事務局】 今お話出していた所、4ページの下から2行のところですね、「次代の日本を担う自立心と人間力に満ちた社会人を育成し、優れた技術者を世に輩出する」こと、というのがありますが、これについては、中期目標の中に記載がございまして、そこを生かして持っているというところでございます。

【委員A】 分かりました。根拠はあるということですね。はい。だから別に、私ここに評価委員としての当時の議論としての面子を載せるのは異論はありません。評価のところだけを、BだCだと言っている話ではないというのは私も同意見です。

【委員長】 ほかに何かご意見ございますでしょうか。今、いろいろご意見いただいた訳でございしますが、各委員のご意見をきちんと整理いたしまして、全体の整合性、等々も見て、場合によっては一部修正する、というようなことも事務局にお願いしたいと思いますが、そういうことでよろしゅうございますでしょうか。

【事務局】 事務局からよろしいでしょうか。4ページの②番のところ、5W1Hの所、B委員から討議いただいておりまして、この部分につきましては、例えば表記をですね、トーンを

下げると言いましょうか、②のところ、2行目の部分ですね、「また法人の取り組みを市民を含め広く周知されるためのものであることから」、例えばここを消して、少し表現を緩くしたり、あと、一番最初のところ、なお、業務実績報告書の記載方法については、例えば、「継続して次のことを配慮してもらいたい」、というような表現をして、若干トーンが下がるかなと思っておりまして、その辺りお話いただけるとありがたいと思うんですが。

【委員B】8ページの議事録にはですね、説明資料の1番の8ページでございますけれども、②の私の言った意見の所が書かれてるんですけども、黄色で、その下にですね、法人様から、「次回からはそのようにしたい」とありますので、私はぴったり合ってるんじゃないかなと思って。これで良いんじゃないかなと思います。法人様がいろいろ仰っていればね、書き方もあるんでしょうけれども、そのようにしたい、というご意向もございますので、期待したいというふうに思っております。

【委員長】活発なご意見どうもありがとうございました。事務局の方で今日出ました意見等を参考にしながら、最終案を作っていただくということになります。それにつきましては、私の方で見させていただいて、本当にそれが皆様方のご意見だったかどうかを確認させていただきます。それから大きく外れているようであれば、再度委員の皆様方に、直接お話を聞くこともあるかと思いますが、そういうことでよろしゅうございますでしょうか。

【委員B】よろしいです。

【委員A】それで結構です。あとは国語の問題だと思うので。

【事務局】はい。ありがとうございます。それでは今、いろいろお話いただいたところでいきますと、先ほどの4ページの①のところ、文言を足すというのがまず一つ、かと思っております。ちょっと読みますと、「また、指標は、中期計画の進捗状況を図るものであることから、指標17番のコンテンツ改修等」、「等」という言葉が入りまして、あと後ろ続けまして、「年度計画と中期計画の指標について、整合性を確認していただくとともに、定量的な指標については、中期計画で定めた指標に係る数値を掲載し、その変遷が分かるようにしていただきたい」、若干言葉を入れた程度でございますが、これでご意見の趣旨が、生かされるかなと思っております。今日いろいろお話しいただいた中ではそこだと理解しておるところでございますが、それでよろしいかどうかちょっとご意見をいただければと思います。

【委員長】ということでございますが何か。ただ今説明ございましたけども、それについてのご意見、ございますでしょうか。

【委員A】よろしいですよ。

【委員B】良いと思います。トーンを弱めることが目的ではございません。事務局修正案で良いと思います。

【委員長】よろしゅうございますか。はい。最終案を、文章にさせていただいたところにつきましては、私も読ませていただいて、皆様のご意見をきちっと、言われたことに一致しているかどうか確認させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。それで

は、ほかに皆様から何かご意見等ございますでしょうか。よろしゅうございますか。ご意見がないようでしたら、本日出されました意見を踏まえまして、事務局で評価書（案）の修正をお願いしたいと思います。先ほど申しましたように、私の感じた印象と違っていればまたそこで直していただくことをしたいと思っております。他にご意見がないようであれば、評価書については、そういうことでよろしゅうございますか。

【委員各位】　～了承～

【委員長】　どうもありがとうございました。事務局ほかに何かありますか。

【事務局】　今後の評価スケジュールについて説明いたします。～評価スケジュールについて、資料3により説明～

※スケジュールについて、質疑応答はなく、了承された。

議題（２）その他

事務局から、年度評価の実施要領の見直しについて説明。

年度評価については、小項目別評価を４段階、項目別評価と全体評価を５段階とし、どの評価もアルファベットの「A、B、C、D」によりランク付けをしているため、分かりにくいという意見がある。そこで、現中期目標期間中は、現在の方法による評価を継続し、次期中期目標の策定に合わせて、見直しを検討したい旨説明し、了承された。